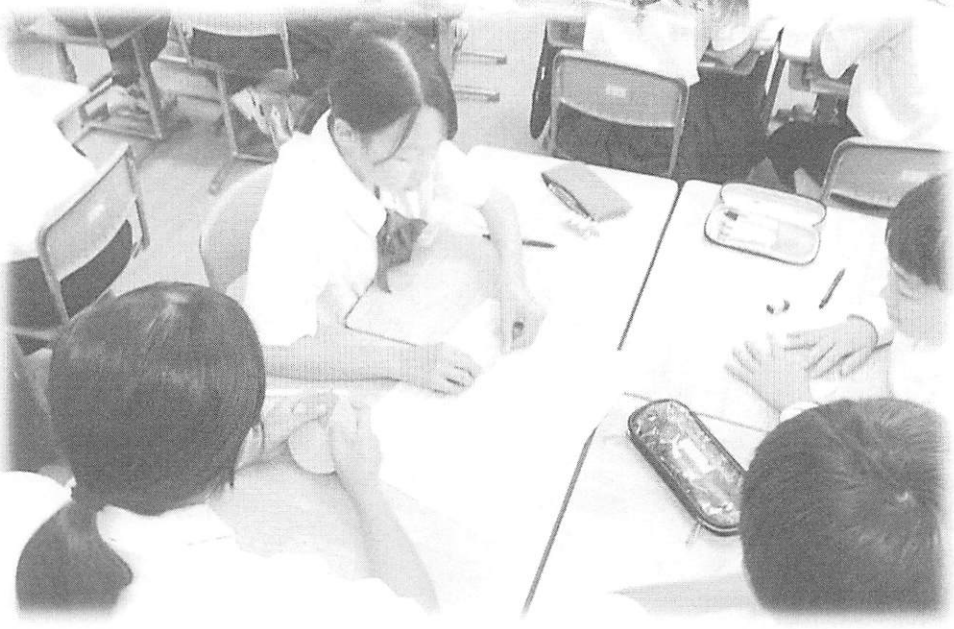
第Ⅱ部　教科領域別研究



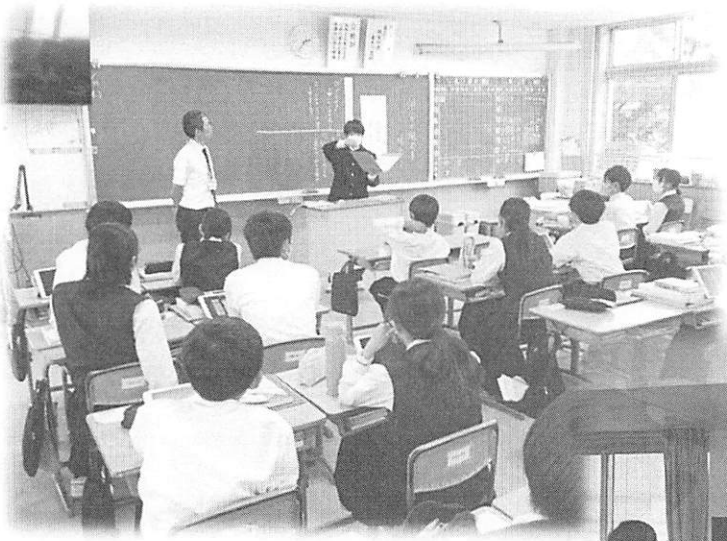


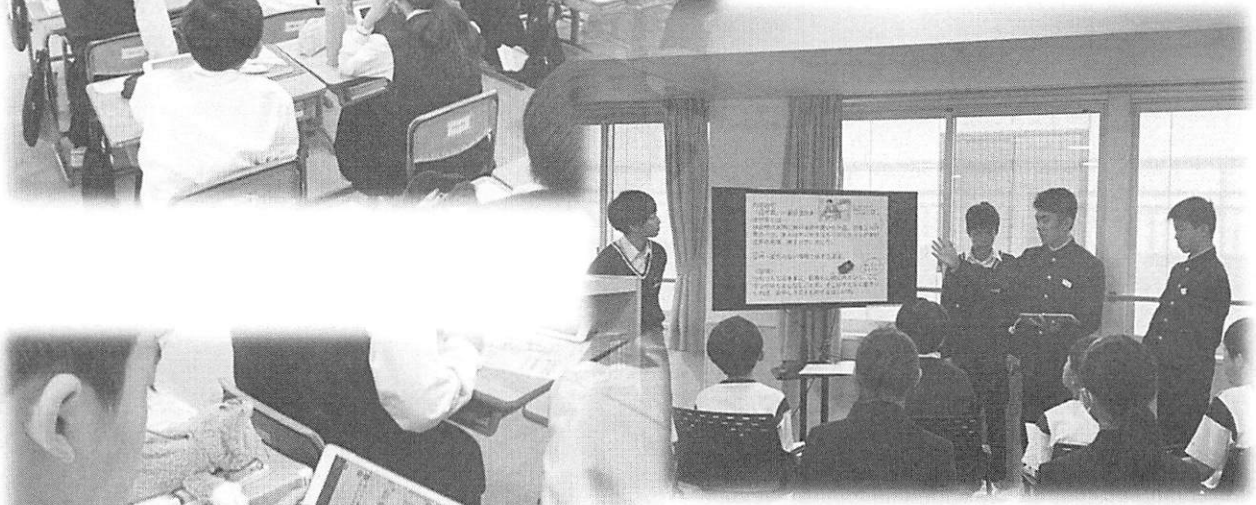


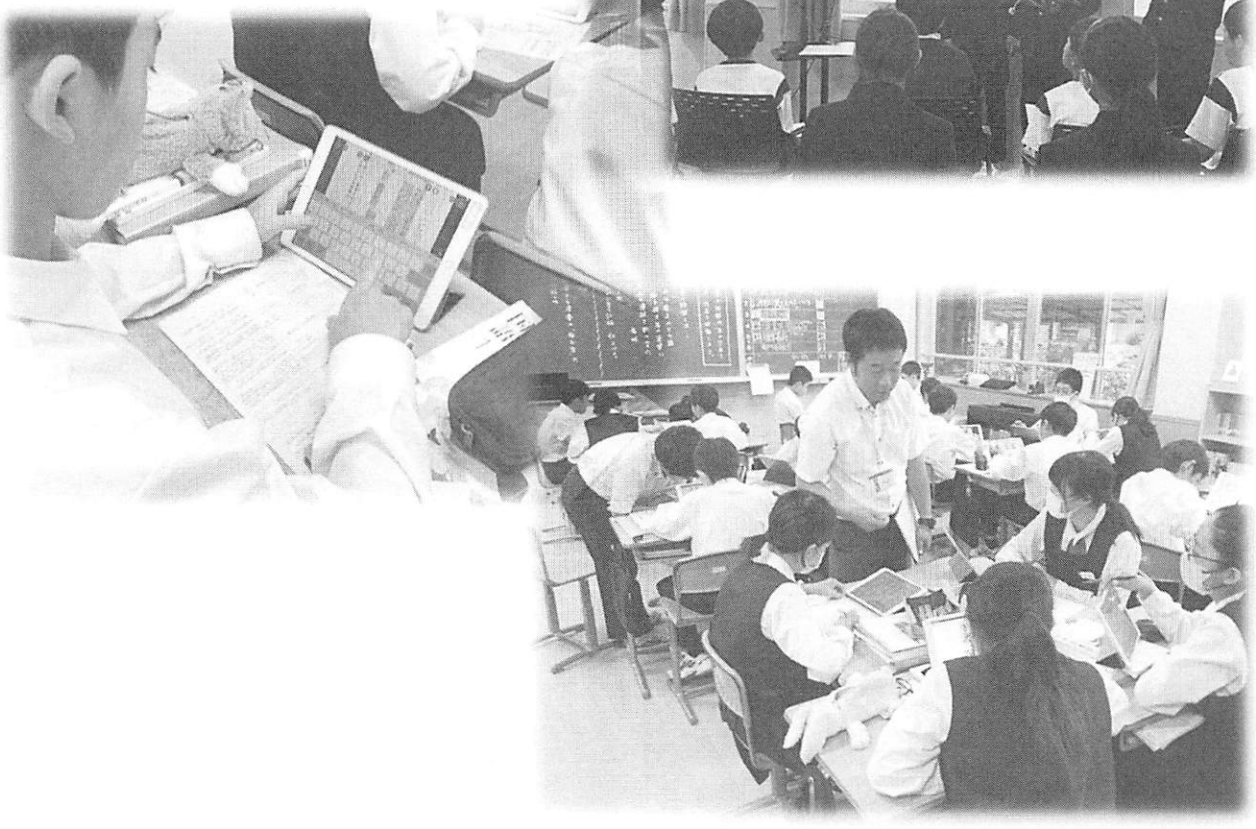
国語科

教科領域別研究テーマ

【言葉による深い学びを通して
メタ認知力を育む学習指導と評価の工夫】







国語科

言葉による深い学びを通してメタ認知力を育む学習指導と評価の工夫

実践者　兵頭　宣彦、堀内　賢吾、渡部　真吾
研究パートナー　清田　朗裕、小助川　元太

1　研究テーマ設定の理由

本校の研究主題は「エージェンシーを発揮して、変革を起こす力を持った生徒の育成―メタ認知力を育成する指導と評価の探究―」である。本校では、エージェンシーを「現状をよりよくする力」と定義している。エージェンシーは、自分で目標を設定する場面や責任を持って行動する場面、それらを振り返る場面において発揮されると考えられる。また、メタ認知力とは、自らの思考や行動を客観的に把握し、調整する力のことである。現状を把握し、改善するメタ認知力は、エージェンシーの発揮と大きく関わる。国語科の学びの中で、生徒がメタ認知力を発揮できる場面を教師が意図的に設定するとともに、生徒に自分の思考や行動を自覚的に修正させることで、生徒のメタ認知力を育成したいと考える。

昨年度は「エージェンシーを発揮する場面の設定」と「エージェンシーを育む振り返りの工夫」という二本立てで研究に取り組んだ。「エージェンシーを発揮する場面の設定」では、生徒が課題解決の筋道を計画したり、学習方略を工夫して解決したりしていく中で、自らの学びを自覚的に修正する姿が見られた。また、「エージェンシーを育む振り返りの工夫」では、自らの学びの変容やその原因について、自分の言葉で説明しようとする生徒の姿が見られた。これらは、メタ認知力を発揮している姿であると言える。昨年度の段階では、学びの副産物として発揮する姿が見られたメタ認知力を、今年度は意図的に指導し、高めさせたいと考え、本研究テーマを設定した。

2　研究の内容及び方法

(1)　メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫

生徒が学習目標を設定したり、学習方略を工夫したりして、課題解決に取り組むことができる自己調整型の主体的学習単元を設計する。「教科書を学ぶ」のではなく、「教科書で学ぶ」教科である国語科の特質を生かすことで、柔軟な単元設計が可能であると考える。本時の学びを受けて、次時の学習目標や学習方略を修正したり、他者の学びをもとに自己の学びを調整したりしていく中で、メタ認知力を育成したい。

(2)　メタ認知力を育む振り返りの工夫

教材での学びを通して、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の資質・能力を高めている最中に、自らの学びがどうであるかを客観的にモニタリングすることは難しい。したがって、(1)の単元デザインと連動させる形で、生徒が定期的に学習目標や学習方略を振り返ることができるような OPP シートやデジタルポートフォリオを作成する。自らの学びを、言葉を用いて説明したり、修正したりすることを通して、メタ認知力を育成したい。

3　研究の実際

(1)　実践と検証　その１（実践者：兵頭　宣彦）

ア　指導の計画

（ア）単元名

古典の魅力を語らおう～ツレラボ 2024～（第２学年「徒然草」）

（イ）単元目標

○現代語訳や語注などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を知ることができる。　〔知識及び技能〕(3)イ

○文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。　〔思考力、判断力、表現力等〕Ｃ読むこと(1)オ

○言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする。　「学びに向かう力、人間性等」

（ウ）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
現代語訳や語注などを手掛かりに「徒然草」を読むことを通して、筆者のものの見方や考え方を知ることができている。((3)イ)	「徒然草」を読んで味わった魅力について、互いの知識や経験と結び付けて語り合うことを通して、それぞれの考えを広げたり深めたりしている。（Ｃ(1)オ）	他者と協働しながら、筆者のものの見方や考え方を捉え直したり、「徒然草」の魅力を伝え合ったりする活動に粘り強く取り組んでいる。

（エ）指導計画

生徒たちのメタ認知力を育成するために、本単元では二つの手立てを講じる。

一つ目は、メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫である。本単元では PBL（Problem-Based Learning）を取り入れた学習指導を行う。PBL とは、実世界で直面する問題の解決を通して、基礎と実世界とをつなぐ知識の習得、問題解決に関する能力や態度を身に付ける学習過程である。PBL は以下の学習サイクルで行われる。（資料１）

展　開	分　類	内　容
Phase1	問題の定型化と分析	問題シナリオの提示（Problem Scenario）
Phase2		関連する事実の特定（Identify Facts）
Phase3	自己調整型学習	仮説の生成（Generate Hypotheses）
Phase4		不足する知識の特定（Identify Knowledge Deficiencies）
Phase5		新たな知識の応用（Apply New Knowledge）
Phase6		知識の一般化（抽象化）（Abstraction）
Phase7	—	評価（Evaluation）

資料１　PBL の学習サイクル

Hmelo-Silver は、PBL の効果として次のようなものを挙げている。「①広く柔軟な知識基盤を構成すること。」「②効果的な問題解決スキルを身に付けること。」「③自己主導的な学習スキルを身に付けること。」「④効果的なコラボレーションスキルを身に付けること。」「⑤学ぶこと自体について興味を持つこと。」これらは、本校が目指している「エージェンシー」の発揮につながるものだと考える。また、特に Phase3～Phase6 の自己調整型学習を通して、生徒が自己の学びを客観的に捉えたり、調整したりすることで、メタ認知力の育成を目指す。

二つ目は、メタ認知力を育む振り返りの工夫である。自分の設定した目標や教師の設定した目標に照らし合わせ、学習を振り返ったり、修正したりしたことを生徒が自己評価していくことは、メタ認知力を育成することにつながる。「学びの羅針盤」（OPP シート）を

活用し、授業での学びの成果や変容を言葉でまとめさせる。また、その「学びの羅針盤」を教育支援ソフト「ロイロノート・スクール」(以下ロイロノート)上で共有することにより、生徒と教師がその日の学びや振り返りを手元で確認する。そして、その学びや反省を次の授業につなげる。このことを通して、生徒が自己の学びを客観的に捉えたり、次の学びに向けて調整したりすることで、メタ認知力の育成につなげたいと考える。

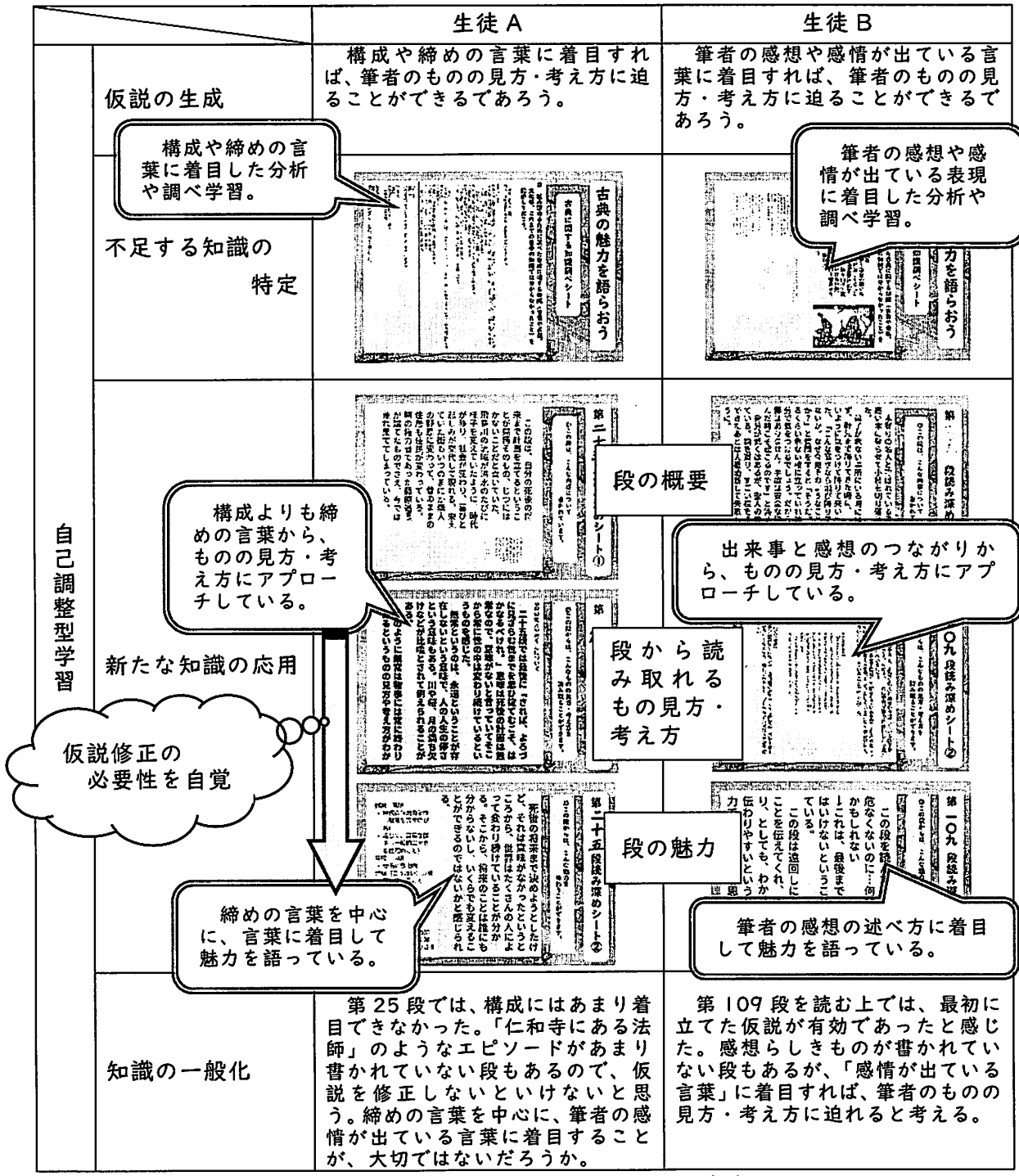
時間		ねらい・学習内容	重点	評価規準(評価方法)
1 2	問題の定型化と分析	問題シナリオの提示 ・解決すべき課題を知ることを通して、単元の見通しを持つことができる。(一斉) ・冒頭と第52段を音読したり、現代語訳を理解したりすることを通して、文章の特徴を理解することができる。(個人)	態 知	・単元の学習を通して、どのような資質・能力を高めるかを理解している。(**「学びの羅針盤」**) ・冒頭と第52段を音読したり、現代語訳を理解したりする中で、「徒然草」の特徴を理解している。(**「学びの羅針盤」**)
3		関連する事実の特定 ・冒頭と第52段を読むことを通して、筆者のものの見方や考え方を読み取ることができる。(全体) ・読み取ったことを知識や経験と結び付けて語り合うことを通して、自分の考えを広げたり深めたりすることができる。(全体)	知 思	・現代語訳や語注を手掛かりに、冒頭と第52段を読み取り、筆者のものの見方や考え方を知ることができている。(**「学びの羅針盤」**) ・冒頭と第52段を読んで理解したことを知識や経験と結び付けて語り合うことを通して、自分の考えを広げたり深めたりすることができている。(**「学びの羅針盤」**)
4	自己調整型学習	仮説の生成 ・前時の学びを振り返ることを通して、筆者のものの見方や考え方へ迫る方略について仮説を立てることができる。(小集団)	思	・前時の学びを基に、仮説を設定し、課題解決の筋道をつかむことができている。(**「学びの羅針盤」**)
5		不足する知識の特定 ・担当する段を読むことを通して、仮説を検証する上で必要となる知識を特定することができる。(小集団)	知	・古文独特の言い回しや当時の風習等、自分たちで仮説を検証する上で不足する知識を特定することができている。(**「学びの羅針盤」**)
6		新たな知識の応用 ・前時の学びを生かすことを通して、担当する段を読んで感じられた魅力について考えることができる。(個人→小集団)	思	・古文独特の言い回しや当時の風習等、調べたことを生かして、各段から感じられたものの見方・考え方についてまとめることができている。(**「学びの羅針盤」**)
7		知識の一般化 ・これまでの学びの共有を通して、前時までの学びが仮説とつながっているかを確認し、検討・修正することができる。(小集団→全体) **自己調整型学習**を通して、生徒が自己の学びを客観的に捉えたり、調整したりすることで、メタ認知力の育成を目指す。	知 思	・「徒然草」に表現されている筆者のものの見方や考え方を捉え直すことができている。(ワークシート) 〈支援〉随筆であることから、その語り口に着目させる。 ・「徒然草」を読んで味わった魅力を捉え直すことができている。(**「学びの羅針盤」**) 〈支援〉担当した段だけの魅力ではなく、全体を包括した魅力になるよう助言する。
8 9 10 本時		・「ツレラボ 2024」に向けて準備をすることができる。(小集団) ・「ツレラボ 2024」での発表や対話を通して、課題の解決に迫ることができる。(一斉)	思 思	・小学生に魅力が伝わる発表になるよう内容・構成を検討している。(発表資料) ・発表や対話を通して「徒然草」を読んで味わった魅力を捉え直すことができている。(発表、対話、**「学びの羅針盤」**)
11		評価 ・学びを振り返ることを通して、仮説の検証が課題の解決につながったかを検討することができる。(全体→個人)	態	・本単元の学習を振り返り、仮説の検証が課題解決につながったかを検討しようとしている。(**「学びの羅針盤」**) 〈支援〉自分の読み取りの変容やそのきっかけについて振り返らせる。

自分の設定した目標や教師の設定した目標に照らし合わせ、学習を修正したり、振り返ったりしたことを**「学びの羅針盤」**に記入させる。この修正や振り返りを通して、メタ認知力の育成を目指す。

イ　生徒の学びの実際

（ア）メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫について

メタ認知力の育成に関わる自己調整型学習の部分に焦点を絞って、生徒の学びを示したい。自己調整型学習の「仮説の生成」「不足する知識の特定」「新たな知識の応用」「知識の一般化」という四つの過程の中で、生徒Ａ・Ｂは、以下のように学びを深めた。（資料２）



資料２　ワークシートにおける記述の変容

（イ）メタ認知力を育む振り返りの工夫について

ロイロノートで作成した「学びの羅針盤」への記述の変化を追いたい。ここでも、メタ認知力の育成に関わる自己調整型学習の部分（「仮説の生成」「不足する知識の特定」「新たな知識の応用」「知識の一般化」）に焦点を絞りたい。

	生徒C	生徒D
【仮説の生成】での振り返り	私は、筆者の意見が書かれている部分に着目するという仮説を立てました。なぜなら、「徒然草」の冒頭と第52段には、筆者の意見がはっきりと語られていて、そこからものの見方・考え方に迫ることができたからです。	「書かれている事実に基づいて筆者の心情が書かれているという構成に着目すれば、筆者のものの見方・考え方に迫ることができるだろう」と仮説を立てましたが、これは、段の書きぶりにもよるのかもしれないと感じました。
【不足する知識の特定】での振り返り	読み進めていく中で、個人で考えていた「筆者の意見に着目する」という仮説は役に立たないことが分かりました。なぜなら、私が選んだ段には筆者の意見が直接的に書かれていないからです。事実の書かれ方から筆者のものの見方・考え方に迫りたいです。	私が選んだ第231段は、第52段と共通点があるように感じました。それは、誰かから聞いた話を題材にして、最後に自分の思いが語られているという構成だからです。したがって、仮説を基に読み深めていくことで、筆者のものの見方・考え方が分かると思いました。
【新たな知識の応用】での振り返り	事実の書かれ方から筆者のものの見方・考え方に迫っていく方法で、この段には分かりやすい落ちが見えてきました。この落ちから、第98段を書いた兼好法師の遊び心を感じました。	仮説では「書かれている事実」と表現したが、段によっては、兼好法師が誰かに聞いたことも含まれているので、「ストーリー」とか「エピソード」という表現に修正することが良いかもしれないと思いました。
【知識の一般化】での振り返り	仮説通りにはいきませんでしたが、仮説があったからこそ、視点を持って読み進めることができたし、違和感をもとに仮説を修正し、筆者のものの見方・考え方に迫ることができました。	読み取っていく中で仮説は少し修正しましたが、筆者のものの見方や考え方、さらには「徒然草」の魅力に迫る上で、仮説は役立ったと思います。仮説があったことで、関連性や共通点を探しながら、他の段を読みました。

※ ＿＿線は文章についての気付き、＿＿＿線は仮説の修正についての記述。（兵頭による）

資料３　「学びの羅針盤」における記述の変容

ウ　考察

（ア）メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫について

「仮説を立てて読むという今回の学びは、『徒然草』を読み深める上で有効でしたか？」という問いに対して、93.5%の生徒が肯定的な回答をした。Phase3～Phase6 の自己調整型学習は、自ら仮説を設定した上で読み取りを行うため、常に仮説を意識しながら古文や現代語訳を読む必要がある。学びの実際における生徒Aは、仮説をもとに文章と向き合ったからこそ、その特徴を客観的に把握し、仮説の修正に役立てることができた。また生徒Bは、大きな仮説の修正こそなかったものの、着目するポイントを少し変えるという、読みの方略の工夫に気付くことができた。

ただし、国語科のどの教材においても PBL 型の授業が有効というわけではないと考える。有効な教材、そうではない教材を検討していく必要がある。また、PBL 型の授業を通して、どのような資質・能力を育成するかということを常に意識するべきだと感じた。国語科の学びとして成立させるためには、「言葉に着目させる」という視点が大切であろう。

（イ）メタ認知力を育む振り返りの工夫について

「あなたは『学びの羅針盤』を書くことで、授業で深まった学びを客観的に振り返ることができましたか？」「あなたは『学びの羅針盤』を見返して、前の授業の振り返りを次につなげることができましたか？」という問いに対して、どちらも96.8%が肯定的な回答をした。

学びを客観的に振り返るという意味で、単元を通して「学びの羅針盤」を書くことが有効であったことが分かる。また、客観的に振り返って書くことを通して、学びや考えがどのように変容したのか、そのきっかけが何であったかを自覚することができていた。生徒C・Dともに、＿＿線部で文章の特徴に気付き、＿＿線部で仮説を修正している。（資料３）

ただし、振り返りが生徒を評価するためのものになったり、形骸化したりすると、メタ認知力の育成とは違った意味を帯びてきてしまう。視点を明確にして行うとともに、次時や次の単元での学びに生かせるものになるよう心掛けさせたい。

⑵ 実践と検証　その２（実践者：堀内　賢吾）

ア　指導の計画

（ア）単元名

詩を読み味わおう

（イ）単元目標

○事象や行為、心情を表す語句の量を増やすとともに、語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して話や文章の中で使うことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。〔知識及び技能〕(1)ア

○文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えを確かなものにすることができる。〔思考力、判断力、表現力等〕Ｃ読むこと(1)オ

○言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を生活に役立て、我が国の言語文化を大切にして思いや考えを伝え合おうとする。「学びに向かう力、人間性等」

（ウ）単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
語句の辞書的な意味と文脈上の意味との関係に注意して読むことを通して、語感を磨き語彙を豊かにすることができる。(1)ア	詩から読み取った内容について語り合う活動を通して、自分の考えを確かなものにすることができる。C(1)オ	詩を読み深めるために設定した観点を振り返り、今後の文学的文章の読解に生かそうとしている。

（エ）指導計画

ａ　単元デザイン

本単元は、詩を深く読むために必要な観点について学習する単元である。生徒が学習方略を設定し修正する活動を行う中で、メタ認知力を発揮して詩を読むために必要な観点について考えさせていく。このことにより、生徒は次の単元でメタ認知的モニタリングを発揮して学習方略を設定し、詩を読み深めるとともに、群読に適した詩を選定できると考える。生徒は文学的文章を読んで描写を基に、場面の展開や登場人物の心情の変化を読み取り、それを他者に伝え合うことで作品のテーマを読み取ることができている。しかし、自分が文章を分析・解釈する際に、どのような観点で読むのかを設定したり、読みが深まったきっかけについて振り返ったりしていないために、学んだことを今後の学習や、社会生活おいて生かせているとは言い難い。そこで、単元の初めに過去の学習を振り返らせることで、メタ認知的モニタリングを働かせ、作品を読み深めるために必要な観点を設定させる。そして、自分が設定した観点について振り返りを行うことでメタ認知的コントロールが働き、次の学習や社会生活に向けて目標を立てることができると考える。

ｂ　使用教材

詩は韻文であり、心情や情景、形式、リズムなど多様な観点を設定して読み深めることができる。観点を設定して読むことで、生徒たちは詩を分析的に読むことができる。また、分析的に読んだことを基に自らの経験や知識と結び付ける中で、生徒たちは詩を解釈的に読み味わい、詩の持つ魅力に迫ることができる。

本単元では谷川俊太郎の「生きる」を教材として取り上げる。「生きる」は彼の代表作の一つで、シンプルな言葉で「生きる」という普遍的なテーマを力強く表現されている。対句や体言止めといった表現技法、リズム、漢字とひらがなの使い分けなど、様々な観点から読み深めることができる作品である。言葉が直接的でありながらも深い意味を持ち、誰もが共感できる生きることの豊かさや多様性を読み味わうことができる作品である。

時間	ねらい・学習活動	重点	評価規準（評価方法）
1	・パフォーマンス課題や解決への筋道を知る活動を通して、単元の見通しを持つことができる。	態	・解決すべき課題と単元の見通しを持つことができる。（ロイロノート）
	・文学的文章を読む際に大切になる観点について振り返る活動を通して、詩を読む上で必要な観点を自分なりに設定することができる。	知	・過去の学習から詩を読む上で必要な観点を設定することができる。（ロイロノート）
	・詩を音読したり語句の意味を調べたりすることを通して、詩の内容をつかむ。	知	・語句の辞書的な意味と詩の中での意味をまとめることができる。（ワークシート）
2	・設定した観点を基に自分で問いを立て、意識して読むことを通して、詩の内容や魅力を自分なりに考えることができる。	思	・観点を基にして詩を読み取るための問いを立て、言葉を根拠として読み取ったことをまとめることができる。（ワークシート）
3	・自分が立てた問いに対して読み取った内容について語り合う活動を通して、作品の主題やテーマについて根拠を明らかにして説明することができる。	思	・読み取った内容を語り合うことで、作品の主題やテーマについて根拠を明らかにして説明することができる。（ワークシート） 〈支援〉語り合う活動で新たに気付いたことをまとめさせる。
	・観点を設定して読み取りを行った効果について振り返る活動を通して、文章を読み深めるための観点について再検討することができる。	態	・詩を読み深めるために設定した観点を振り返り、今後の文学的文章の読解に生かそうとしている。（ロイロノート） 〈支援〉観点を明確にして書かせる。

メタ認知力向上のための取組①

今までの学習の振り返りを通して、自己の学びを客観的にとらえたり、詩を読むために必要な観点を考えたりすることで、メタ認知力の育成を目指す。

メタ認知力向上のための取組②

観点を設定して読み取りを行った効果について振り返ることを通して、観点の多様性に気付くとともにメタ認知力の育成を目指す。

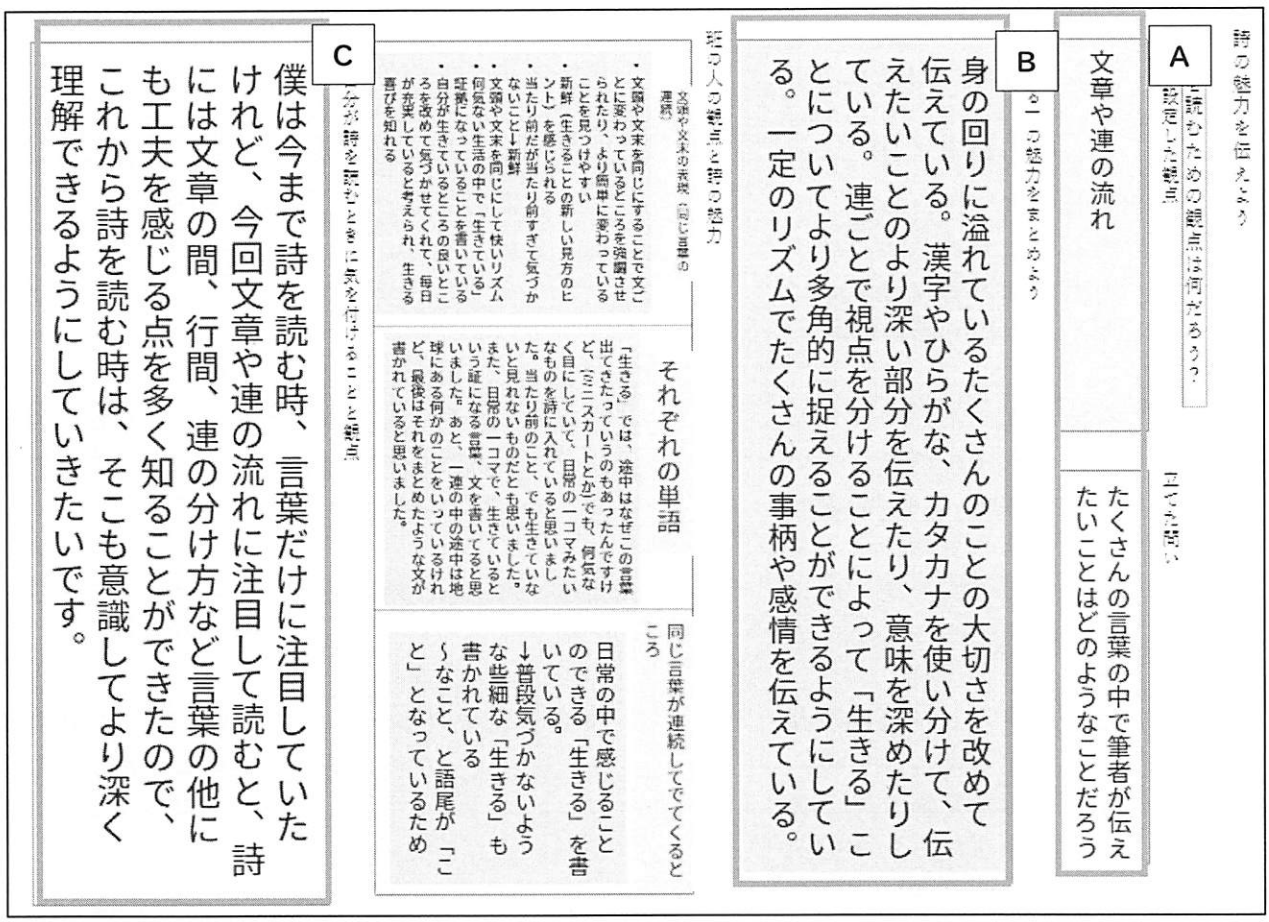
イ　生徒の学びの実際

（ア）メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫

単元の始めに過去の学習を振り返り、どのような観点で文学的文章を読んできたのか改めて考えさせた。生徒は今までの文学的文章の学習を思い出し、人物の心情や段落、情景、表現など、多様な観点で文学的文章を読んでいたことを再確認することができていた。その中で「『生きる』を読んでいくためにはどのような観点を設定すれば良いだろうか？」と問いかけた。生徒は振り返りを生かして、詩を読むために何の観点が良いかを決め、その観点に該当するような問いを立てた（資料１中のA)。生徒は自ら立てた問いに対して言葉を手掛かりとし、自分なりに作品を読み解こうとしていた。そして、他

者に自分の考えを説明することで、作品の主題やテーマをまとめることができた（資料Ⅰ中のB)。また、自分の設定した観点とは違う観点で読んだ生徒の話を聞くことで、自分の観点だけでは考えにくい読みの視点に気付くことができた。

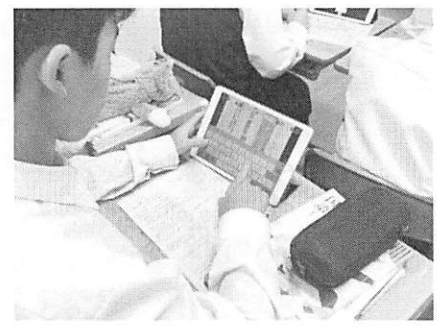
単元のまとめでは自分が設定した観点について振り返らせた（資料Ⅰ中のC)。生徒は「詩を読む時に気を付けたいと思う観点は、『連の意味』と『題名』です。」や「今後自分が詩を読む時には、一つ一つの言葉に込められた想いや意味を読み取り、筆者が詩全体を通して伝えたいことが何なのか観点を生かして読みたいと思います。」など、観点を設定したことで自分がどのように作品を読んだのかを言葉にして振り返ることができていた。また、自分が詩を読むときに観点を立てて作品を読み深めたいという振り返りが見られ、今回の学習を通して、文章を読む際にどのような観点で読むか、見通しを立てて文章を読むという意識を持つことができたと考える。



資料Ⅰ　ロイロノートでの単元の振り返り

（イ）メタ認知力を育む振り返りの工夫

メタ認知力を育む振り返りの工夫として、「今後自分が詩を読むときに気を付けること」についてロイロノートに記録をさせた。生徒は自分の読みを振り返るとともに今後どのようにして詩を読んでいきたいかまとめた。生徒の振り返りでは「今まで詩を読む時、言葉だけに注目していたけれど、今回文章や連の流れに注目して読むと、詩には文章の間、行間、連の分け方など言葉の他にも工夫を感じる点を多く知ることができたので、これから詩を読む時は、そこも意識し



ロイロノートでの振り返り

てより深く理解できるようにしていきたい。」や「言葉の意味に着目して詩を読むことで、『いのち』の意味のように、言葉の深い意味を理解することができた。この詩では『いのち』の意味が、筆者の考える『生きるということ』の意味に直結していると考えたので、言葉の意味、言葉の表現の意味を考えることが大切だと感じた。」と自分の読みの方法について観点を立てて振り返り、今後の自分の文章読解に対して見通しを立てることができた。

ウ　考察

（ア）メタ認知力を育む国語科単元デザイン

メタ認知力を育む単元デザインとして、単元の最初に過去の学習を振り返らせ、詩を読むために必要な観点を生徒自身に設定させた。このことにより生徒はメタ認知的モニタリングを行い、今までの学びを振り返るとともに、今回の学習で必要な観点を見いだすことができた。また、観点を設定したことにより、教材の持つ魅力に気付いただけでなく、教材をどう読んだのかを振り返ることができていた。今後は観点を設定するだけでなく、読みの方略を詳しく言語化することが必要であると感じた。そうすることで自分の学びを調整するメタ認知的コントロールを行いやすくなると考える。また、メタ認知的コントロールをよりよくするために、教材をどう読んだのか自分の読みの方略を蓄積していくことが重要であると考える。ロイロノートなどのデジタルコンテンツを効果的に活用し、学んだ結果だけでなく、学びの過程を分類して整理し保存していくことが重要であると考える。

この小単元の後には群読の詩を選定する単元が控えている。生徒から「群読を選ぶときにも観点を設定して詩を読み深めていきたい。」という言葉もあり、次の単元に向けて意欲的に活動したいことがうかがえる。今回の単元での学びを生かし、群読で詩を選ぶ際に必要な観点について主体的に考えさせ、より魅力ある詩を生徒と共に見付けていきたい。

（イ）メタ認知力を育む振り返りの工夫

メタ認知力を育む振り返りの工夫では、「今後自分が詩を読むときに気を付けること」について自分の読みを振り返らせた。今後の学習の見通しを持たせる質問にしたので、生徒は自分の読みを振り返るとともに、どのようにして詩を読んでいきたいかについてまとめることができていた。また、生徒の振り返りから「行間」や「言葉の表現」など様々な観点に気を付けたいと書かれており、観点の多様性に気付くことができていた。また、観点を設定させたことで自分がどのように詩を読んだのかを言語化することができていた。このことから自分の学びやその過程をいかに言語化するかが重要であると再認識した。今回は観点と問いを設定したが、読みの方略を設定することで自分の方略を振り返り、自分の方略の仕方を見つめたり、メタ認知的コントロールを発揮して学びの修正を行ったりすることができると考える。そのためには、生徒が自分の読みの方略を言語化するとともに、振り返りの際には自分の読みの方略を振り返ることができるように具体的な文章化のガイドを提案したり、テンプレートを作成したりするなど、生徒が書き進めやすいような工夫が必要になる。

⑶　実践と検証　その３（実践者：渡部　真吾）

ア　指導の計画

（ア）単元名

行書で書いてみよう

（イ）単元目標

○漢字の行書の基礎的な書き方を理解して、身近な文字を行書で書くことができる。
〔知識及び技能〕⑶エ(イ)

○根拠の明確さなどについて、読み手からの助言などを踏まえ、自分の文章のよい点や改善点を見いだすことができる。　〔思考力、判断力、表現力等〕Ｂ書くこと(1)オ

○言葉がもつ価値に気付くとともに、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合うことができる。　「学びに向かう力、人間性等」

＊思考力・判断力・表現力について、書写の単元では本来測れないものとされているが、メタ認知力を意図的に働かせる目的で相互評価を取り入れているため、本単元では例外的に組み込んでいる。

（ウ）単元の評価規準

知識・技能	（思考・判断・表現）	主体的に学習に取り組む態度
漢字の行書の基礎的な書き方を理解して、身近な文字を行書で書いている。⑶エ(イ)	根拠を明確にして、助言を踏まえ、自分の作品の良い点や改善点を見いだしている。	行書の価値を認識するとともに、書写を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、文字を書くことの良さを主体的に味わおうとしている。

（エ）指導計画

本単元では、「行書を書くことから発展して相互評価を行い、よりよく書けるように改善すること」をねらいとしている。文字を手で書くことは、瞬時に形を出現させるキーボード入力とは異なり「書き進める過程」が存在している。筆記用具を持って紙に向かい、自分の思いや願いを確かめながら言葉を紡ぎ出していくのが「書く」ということである。文字を書くとき、紙面のどの位置から書き始めるのかを考えて始筆し、送筆、終筆と書き進めることで一つの点画となる。そして、終筆後、筆記用具の先端は紙から離れ、次の点画の始筆へと向かう。これが筆順に従って繰り返されることで、文字となり、文、文章となっていく。つまり、紙に向かって筆記用具を持って書くという行為は、思考することと深く関わっており、多くの学びが手書きによって行われているといえる。また、書く過程においては時に応じて用具・用材を主体的に選択したり、丁寧さに注意を払ったりするなど、相手意識・目的意識を伴って書かれることも多く、文字を通した人間関係やコミュニケーション能力を育成することにもつながる。

指導では、情報機器の使用が日常化し、デジタルコンテンツの使用が広がる中で、文字を手で書くことの意義や価値をしっかりと捉えておく。一方で、近年数多くの種類の筆記用具が登場しており、社会で「手書きすること」の魅力やすばらしさが再確認されている点も踏まえておきたい。その中で、今回は自他の評価活動を取り入れ、自己評価をした後に意図的に他者意識を持たせることで、行書の特徴をより意識できるように工夫した。書写の相互評価に関する先行研究については、篠崎・青木（2018）の低学年を対象とした小学生での実践は多くあるが、中学生を対象にしたものは少なく、希少性の高い実践といえる。そして、行書の特徴のいくつかの観点に沿って書いたり評価したりする活動は、自身のみならず他者から評価される意識が高まり、よりよく書こうというメタ認知力が働くものと考える。また、他者の作品を評価することで、自身の作品を振り返る契機にもなり、メタ認知的モニタリングが醸成されると考える。さらに、評価されたものを参考にし

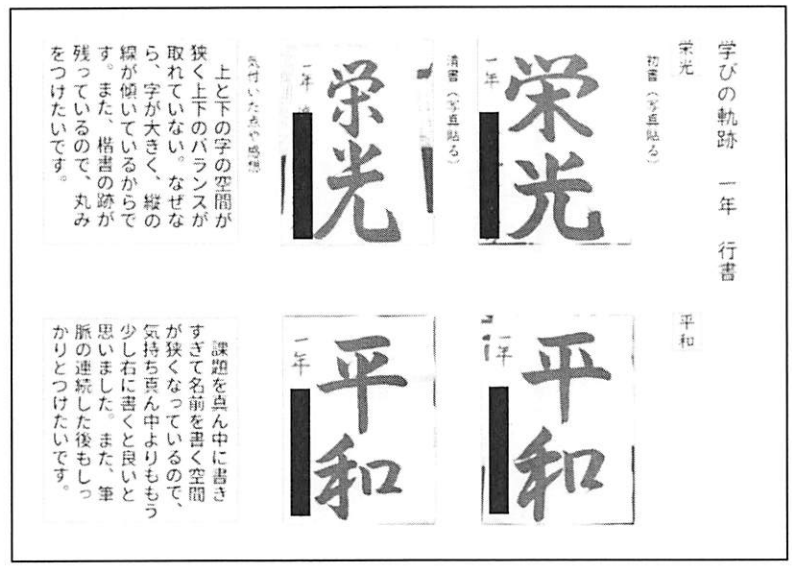
て、もう一度書く活動を取り入れることで、よりよいものにしていこうという思考が働き、深い学びにつながっていくものと考える。

時間	ねらい・学習活動	重点	記録	評価規準（評価方法）
1	楷書と行書の違い「和」 ・解決すべき課題を知ることを通して、単元の見通しを持つことができる。 ・楷書と行書の違いを発見することを通して、行書の点画の特徴などを理解できる。	態 知		・単元の学習を通して、どのような資質・能力を高めるかを理解している。（発表） ・楷書と行書両方で名前や「和」を書き、へん「禾」の部分やつくり「口」等の違いを発見することを通して、行書の点画の特徴を理解している。（ワークシート）
2	行書の筆使い「大」 ・らせん状の線を書くことを通して、行書の滑らかな筆使いができる。 ・行書の「大」を書くことを通して、行書の筆使いを理解して書くことができる。	知 知		・下から上に筆を運ぶときに、手のひらが見えるようにして動かすことを理解している。（観察） ・終筆は、指先で立って次の画に向かうようにはねる筆使いがあることを理解している。（観察）
3	点画の連続と変化１「大木」 ・点画の連続と形の変化を理解して書くことができる。	知	○	・「大」の右払いの終筆は止める等、点画の終筆の変化を理解して書いている。また、「木」の左払いは右払いの始筆に向かうように払う等、筆脈を理解して書いている。（まとめ書き） 〈支援〉運筆の師範動画を提示することで、イメージしやすくする。
4	点画の連続と変化２「栄光」 ・点画の連続と変化を理解して書くことができる。	知	○	・「光」の四画めは横画を書いて折り返して左へ払う等、点画の連続を理解して書いている。「栄」の六・七画めは「払い」を「点」に変化させる等、点画の変化を理解して書いている。（まとめ書き） 〈支援〉運筆の師範動画を提示することで、イメージしやすくする。
5	点画の連続と省略「平和」 ・点画の連続と省略を理解して書くことができる。 前時までの活動を生かしたメタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫	知	○	・「平」の三画めは左払いから横画に直接連続させる等、点画の連続を理解して書いている。また、「和」の四画めは「禾」の部分の点を省略させる等、点画の省略を理解して書いている。（まとめ書き） 〈支援〉運筆の師範動画を提示することで、イメージしやすくする。
6	学習を生かして評価する —行書の特徴— ・これまでに学習してきた行書の特徴を見直すことで、特徴を理解しながら評価することができる。 ・もう一度行書を書くことで、評価したことを生かすことができる。 メタ認知力を育む振り返りの工夫	思 知	○	・点画の連続や変化、省略等、観点を意識して評価している。（ロイロノート） 〈支援〉観点を意識させるため、今まで学習した行書の特徴を全体で確認する。 ・観点や評価等今まで学んだことを生かして、書いている。（ワークシート）

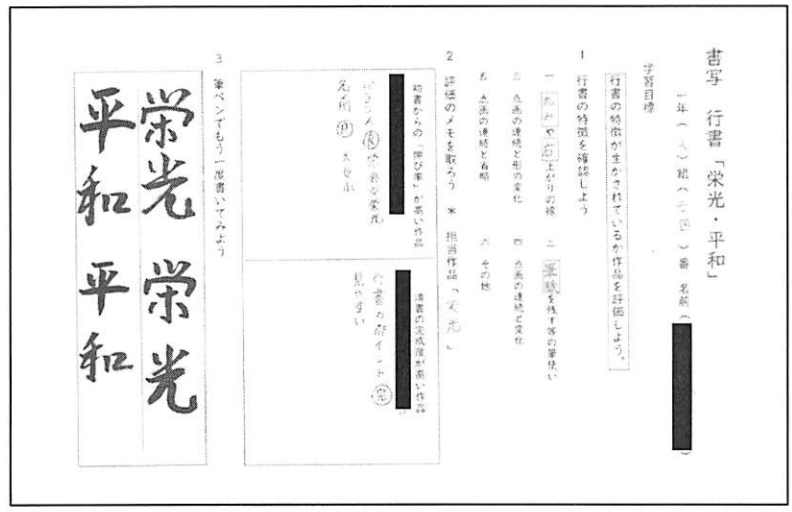
イ　生徒の学びの実際

（ア）メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫

本単元は指導計画の６時に焦点を当てて計画した。１・２時では、行書の基本な運筆等を学習させた。今までに硬筆で「いろは歌」を使って平仮名の行書は学習していたため、その時の知識・技能と関連付けて書けている生徒が多かった。３・４・５時では成果物を制作させた。また、「栄光」「平和」に関しては、資料１のようにロイロノートにまとめ、初めに書いた試し書きとまとめ書きを比べてどう変化しているか自己評価をさせた。ただ、行書の特徴が生かされているかという視点で成果物の評価をさせたものの、実際の気付いた点や感想の記述では、行書の特徴を指摘しているものよりも、文字のバランスや大きさといった全体の様子を指摘しているものが多かった。



資料１　ロイロノートによる学びの軌跡



資料２　ワークシート

６時では、主に資料２のワークシートを使って学習を進めた。始めに行書の特徴について全体で再度確認した上で、前時までにまとめた資料１の回答をロイロノートの機能を使ってクラス共有を行い、一覧を見ることができるようにした。そして、ロイロノート上で相互評価できるようにした。評価の視点として、「試し書きからの『伸び率』の高い成果物」と「まとめ書きの完成度が高い成果物」の二つとし、メモを取らせながらまず個人で活動させた。なお、ここでは「伸び率」を上達具合、「完成度」を行書の特徴等が生かされているものと定義して共通認識を持たせた。その後、４人班で意見を交流させ、出し合った意見を全体で共有しながらまとめた。興味深かった点として、「まとめ書きの完成度が高い成果物」に関しては同じような意見になる一方で、「試し書きからの『伸び率』の高い成果物」に関しては様々な意見が挙がり、複数人の成果物が選ばれていた。複数の生徒が選ばれることによって授業は盛り上がり、意欲的な活動が見られた。



（イ）メタ認知力を育む振り返りの工夫

一つ目に、資料１の「気付いた点や感想」を成果物が完成する度に書かせた。記録を残すことで、生徒がどんなことに気を付けて書いたのか、最後に振り返ることができるようにし、よりよく書こうとする過程が視覚的に見えるように工夫した。



二つ目に、相互評価の後、評価された意見を生かして、もう一度書く活動を取り入れた。その際に、何に気を付けて書くかということを意識して書かせるように工夫した。単元が終わった後、どんな力が身に付いたと思うかという質問を行った。そこで、行書についての知識・技能の向上を答えた生徒が多くいたことに加えて、「『伸び率』や『完成度』の共通認識をした上で相互評価を行うことで、どのように書けば上手といえるのか、言葉で説明できるようになった」等、自他の比較を通して新たな学びが生まれたという回答も多く見られた。

ウ　考察

（ア）メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫

５時までで知識・技能を中心に学習し、自らの思考や行動を客観的に把握し、認識するメタ認知力の基礎となる力を付けさせるための活動を取り入れた。成果物の完成に至るまでに、どのように取り組んだかを記録し、自己評価させていくことで、６時の振り返りを含む活動につなげることができた。６時では、今までまとめたものを使って評価活動を行うことで、メタ認知的コントロールを行わせ、そこからモニタリングできるようにした。さらに、評価活動を生かして再度成果物を制作させることで、１時からの学びがどのようにつながったかを視覚的に見ることができるようにし、振り返りがしやすいようにした。

（イ）メタ認知力を育む振り返りの工夫

３点挙げたい。一つ目に、自身の初めの試し書きからまとめ書きに至るまでの過程を振り返らせ、何をどう工夫してまとめ書きを完成させたのか、生徒自身で説明できるように意識させた。また、その振り返りをロイロノートにまとめることでメタ認知力が働き、行書をよりよく書くためのきっかけにつながったと考える。しかし、先の「イ　学びの実際」で少し触れたように、バランスや大きさ等全体のことに触れている生徒は多い一方、単元の目標である「行書の基礎的な書き方」について触れている生徒は自己評価の時点では少なかった。自己評価では評価の観点を「気付いた点や感想」とやや抽象的にしていたので、修正しようとする視点に幅が出てしまったように思われる。

二つ目に、他者の成果物を相互評価することで、客観的なものの見方・考え方を身に付け、メタ認知力をコントロールできるようにする契機とさせた。モニタリング能力が醸成されることで、よりよい成果物にするためにはどうすれば良いかを考え、学びをより深めることができるであろう。さらに、相互評価では行書の特徴を全体で再確認した上で、「試し書きからの『伸び率』の高い成果物」と「まとめ書きの完成度が高い成果物」の２つの視点で評価するよう具体的に指示をしたことで、目標に沿った評価活動ができた。

三つ目に、評価を生かしてもう一度書く活動を取り入れた。何をどう生かすのか意識して書かせることで修正すべき視点が定まり、振り返り活動に深まりがあったと考える。今後は修正する力を更に高めるため、運筆の様子を動画で撮影したり、考えを記述させたりする等、ICT を有効に使って記録に残すという視点も大切にして研究を進めていきたい。

4　研究の成果（○）と課題（●）

国語科では「言葉による深い学びを通してメタ認知力を育む学習指導と評価」について研究してきた。ここでは、３名の研究を総括して研究の内容と方法についての成果と今後の課題についてまとめる。

(1)　メタ認知力を育む国語科単元デザインの工夫

○自己調整型の学習で生徒自身が仮説を立てたことにより、仮説を基にして文章と向き合うことができ、文章の特徴を客観的に把握するとともに、メタ認知力を発揮して学びの修正を行うことができた。

○仮説や観点を立てて文章を読むことで、自分の読みの方略の特徴に気付くことができた。

○単元の初めに今までの学習を振り返らせたことにより、今までの学習を振り返り、メタ認知力を働かせ今回の学習で必要な観点を見いだすことができた。

○評価活動を生かして再度成果物を制作させることで、学びのつながりを視覚的に見ることができ、振り返りしやすくなった。

●PBL の有効な教材について検討していく必要がある。

●単元をデザインするときにどのような資質・能力を育成するかを意識するべきである。

●デジタルコンテンツを活用して、単元で学習したことや自分の思考、学習の方略を蓄積させたい。

(2)　メタ認知力を育む振り返りの工夫

○学びを客観的に振り返ることで、単元を通して学びや考えがどのように変容したのか、そのきっかけが何であったかを自覚することができた。

○学習活動ついてまとめさせることでメタ認知力が働き、次の単元や活動への見通しを持つことにつながった。

○相互評価を行うことは客観的なものの見方・考え方について意識し、自己の学びを調整する契機となった。

●振り返るための視点を明確にして行うとともに、次時や次の単元での学びに生かせるものになるよう注意する必要がある。

●自分の学びやその過程をいかに言語化するかが重要であり、具体的な文章化のガイドを提案したり、テンプレートを作成したりするなど生徒が書き進めやすいような工夫が必要になる。

参考文献

実践と検証　その１

・三宮真智子（2018）「メタ認知で〈学ぶ力〉を高める」北大路書房

実践と検証　その２

・Hmelo-Silver（2004）「Problem-Based Learning　：　What and How Do Students Learn?」『Educational Psychology Review』

・細川美保（2018）「愛媛大学教育学部附属中学校研究紀要」

・小川陽子・豊田有美（2019）「岐阜大学教育学部附属中学校研究紀要」

・溝上慎一（2020）「社会に生きる個性―自己と他者・拡張的パーソナリティ・エージェンシー」東信堂

実践と検証　その３

・篠崎祐介・青木幹昌（2018）「書写における低学年児童の相互評価に関する研究－主体的・対話的な学びによる授業実践を通して」『臨床教科教育学会誌』　18(1)、19-28

・教育出版株式会社編集局（2018）「中学図書　教師用指導書本冊」『教育出版株式会社』